

寒山と拾得像

石に描かれた落書き

1984年9月14日にマグニチュード6.3の地震が長野県に発生し、光徳寺の周囲の石垣の一部が崩れ落ちました。この石像が瓦礫の中から見つかった時には、同じ壁が1854年の地震でも崩れたにもかかわらず、当時はこの石が露出しなかったため地元の人々を大いに驚かせました。

この浮き彫りは、1818年から1831年までの文政時代にこの寺の壁の作業に従事した石切職人の手によるものだと考えられています。唐朝期（618年～907年）に天台山の近くに住んでいた寒山と拾得というふたりの道教僧が描かれており、このふたりは中国と日本の水墨画で好んで描かれた題材でした。隠遁詩人の寒山は、巻物を手に持ち、僧院の厨房の下働きだった拾得は、箒を手に持っています。この不釣り合いな二人組は、悟りとは思いがけない方法で開けるものだという考えを象徴しています。時間の経過とともに、寒山と拾得は、文殊菩薩と普賢菩薩の生まれ変わりだと考えられるようになりました。